

「L. A. ギャングストーリー」 ★★★★★

2013（平成25）年5月12日鑑賞＜T
OHOシネマズなんば＞

監督：ルーベン・フライシャー

ジョン・オマラ 巡査部長（ギャング部隊のリーダー）／ジョシュ・ブローリン
ジェリー・ウーターズ 巡査部長（ロス市警の一匹狼、グレイスと恋に落ちる）／ライアン・ゴズリング
ミッキー・コーエン（ボクサーあがりのユダヤ系ギャングのボス）／ショーン・ペン
パーカー市警本部長（ロス市警のトップ）／ニック・ノルティ
コンウェル・キーラー 巡査（ギャング部隊唯一の頭脳派、盗聴担当）／ジョヴァンニ・リビシ
ナビダ・ラミレス 巡査（ケナードに拾われたヒスパニック系の若手警官）／マイケル・ペーニャ
グレイス・ファラデー（コーエンの情婦）／エマ・ストーン
コールマン・ハリス 巡査（過剰暴力と不服従のパトロール警官）／アンソニー・マッキー
マックス・ケナード 巡査（スゴ腕の拳銃使い）／ロバート・パトリック
コニー・オマラ（オマラの妻）／ミレイユ・イーノス
ジャック・ウェイレン（ジェリーの幼馴染み）／サリバン・ステイブルトン
カール・ロックウッド（コーエンの右腕）／ホルト・マッキヤラー

2013年・アメリカ映画・113分

配給／ワーナー・ブラザーズ映画

＜君はアル・カボネを知ってる？ミッキー・コーエンは？＞

アメリカの最も有名なギャングといえば、アル・カボネ。これは1950～60年代にかけて大ヒットしたTVドラマ『アンタッチャブル』の影響だが、私はこのTVドラマを観ていない。またロバート・デ・ニーロがアル・カボネに扮した映画『アンタッチャブル』（87年）も観ていないからあまり偉そうには言えないが、禁酒法時代の1920年代にシカゴを舞台として政治家や警察などを買収したアル・カボネは、実質的にシカゴ市長ともいべき権勢を誇っていたらしい。なるほど、なるほど……。しかして、さてあなたは1940年代から50年代にかけてロサンゼルスで権勢を誇ったボクサーあがりのギャング、ミッキー・コーエンを知ってる？

アル・カボネがイタリア系ならミッキー・コーエンはユダヤ系だったらしい。また若い頃のミッキー・コーエンはアル・カボネにも会っているらしいが、Wikipediaを調べてもミッキー・コーエンのことはあまり詳しく書かれていないから、ほとんどの日本人は彼のことをあまり知らないはずだ。本作はそんなミッキー・コーエンを、『ミルク』（08年）（『シネマルーム22』42頁参照）の印象が強いためどちらかというと「やさ男」というイメージのショーン・ペンが力強く演じている。冒頭のボクシングのシーンを見ているとそのたくましさで圧倒されるし、ストーリー展開の中で見せる残虐非道なギャングぶりを見ていると嫌悪感すら覚えてくるが、これこそまさにショーン・ペンの演技力！もっとも本作は『L. A. ギャングストーリー』という邦題にもかかわらず、ミッキー・コーエンの伝記映画ではなく、コーエンを倒すべく組織されたロス市警の巡査部長ジョン・オマラ（ジョシュ・ブローリン）を中心とする6人の警察官たちの活躍を描くもの。時代は1949年というから、私が生まれた年。「Hollywood」の大きな看板が掲げられているハリウッドランドで有名なロサンゼルスは、当時コーエンの帝国だったらしい。さあ売春、麻薬、暴力がはびこる暗黒の街で、コーエンVS6人の警察官はいかなる抗争を？

＜「七人の侍」ならぬ「6人の警察官」の原動力は？＞

黒澤明監督の『七人の侍』（54年）は野盗と化した野武士たちの集団と7人の個性的な侍たちとの対決を描く名作だが、弁護士の視点で見ると、農民たちが「七人の侍」を「雇う」という構成が興味深い。つまり、志村喬演じる勤兵衛を中心とした「七人の侍」が農民たちに加担したのは単純な正義感ではなく、侍とはいえ禄を持たない浪人たちが食うためにいわば「用心棒契約」を農民と交わすことによってこの映画が成立したわけだ。それに対して本作ではオマラがコーエン退治を決意したのは「警察官バッジにかけて」という正義感であるところが興味深い。

『七人の侍』で勤兵衛が6人の個性的な侍を集めたのと同じように、オマラは5人の個性的な警察官を集めてチームを組むわけだが、この5人も基本的に正義感だけでチームに参加しているからすごい。人間は誰だって平穏な生活を送りたいから長いものに巻かれるわけで、政治家や警察の上層部がコーエンとつるんでいるのなら、下部の一警察官がコーエンに歯向ってもムダで命を落とすだけ。誰もがそう思う中、オマラや5人の警察官たちはなぜそんな正義感を？207分の『七人の侍』では、5分間休憩を挟む前半部では侍集めと戦いの準備状況が描かれるが、それは本作も同じ。『七人の侍』を真似た『荒野の七人』（60年）と同じように「7人の警察官」としなかったのは史実を曲げたくなかったためだろうが、収まりとしては6人より7人の方が……。

そう思いつつ、勤兵衛が残った残り6人の侍と、オマラが残った残り5人の個性的なキャラと原動力を対比してみれば面白いはずだ。

＜毒を制するには、やはり毒が……＞

私が弁護士登録した1974年当時は「違法収集証拠の証拠能力」というテーマが流行っていた。つまり、適正手続を重視する憲法や刑事訴訟法の下では、いくら有力な証拠であっても違法に収集された証拠は使えないという理論。その典型が盗聴による証拠だ。しかし本作を見ると、6人の警察官の中で唯一人の頭脳派で盗聴担当のコンウェル・キーラー巡査（ジョヴァンニ・リビシ）の活躍なくしては、オマラたちの戦いが成り立たないことは明らかだ。

他方、「毒を以て毒を制す」とは「悪を除くために別の悪を利用すること」だが、その是非は難しい。現在の日本にはびこる「良識派」によれば、軍事力に対して軍事力をもって対抗してはダメ、核に対して核をもって対抗してはダメということになるが、1949年当時ロサンゼルスで牛耳っていたコーエンを取締まるには一体どうすればいいの？何しろ政治家も警察官も押さえられているうえ、判事もコーエンのお友達で、カネや地位はもちろん女の世界までコーエンにしてもらっているのだから、逮捕状のサインなんてとてもとても……。また仮に裁判まで持ち込んだとしても、一体誰が証人として出廷し、コーエンの犯罪を証言するの？そんなことをすれば自分や家族の命が無くなるのがミエミエなのだから……。そんなこんなを考えると、正義感に燃えるオマラたちがコーエンを打倒するため「正義のためなら法をも犯す！」と決意し、そのように行動したのは当然とうなずける。

もっとも、いきなり覆面をしてコーエンが支配するパーを襲ったあげく、客として来ていた警察官たちに反撃され、オマラたちが逮捕されてしまうのはご愛敬。しかし、そんな事態になれば、脱獄だって当然ありだ。次々とコーエンの「シマ」に対して仕掛けていくオマラたちの抗争はまさに「毒を以て毒を制す」を地でいくもので、ギャングの襲撃そのものだ。オマラたちにコーエン退治を密かに呼びかけたのはパーカー市警本部長（ニック・ノルティ）だが、彼もそんな「ギャング部隊」の大活躍に大喜び。ド派手に暴れ回るオマラたちの身元が安易にコーエンに判明せず、コーエンがイライラするという展開は映画のつくり方としていかなるもの？という面もあるが、この際そんな面倒なことは言わず、正義感あふれる6人の警察官たちの「ギャングぶり」を堪能しよう。

＜この恋はロミオとジュリエット以上に危険！＞

『七人の侍』は三船敏郎演じる侍（？）・菊千代と津島恵子演じる百姓の娘・志乃との間の「不器用な恋」が一種の清涼剤になっていたが、本作では準主役ともいべき役割のロス市警の一匹狼ジェリー・ウーターズ巡査部長（ライアン・ゴズリング）とコーエンの情婦グレイス・ファラデー（エマ・ストーン）との恋が一種の清涼剤？もっとも、最初の出会いのシーンを見ていると、ジェリーは単に口の達者な色男だけのように思えるから、これがロミオとジュリエットのような純愛に発展していくとは思えなかったが、2人の恋は意外にも……。

菊千代と志乃の恋はいわば味方陣営内での恋だから、仲間の目さえ盗めば何の危険もなかったが、ロミオとジュリエットの場合はそもそも敵対する家同士に所属する美男美女の恋だから、一目ボレした後にさまざまな障害が待ち受けていたのは当然。そんな目で本作のジェリーとグレイスの恋を見ていると、グレイスはコーエンの情婦だから、ロミオとジュリエット以上に危険。つまり、ちょっとでもそんな気配がコーエンに覚られたら、たちまちグレイスはもちろんジェリーの命もなくなってしまはずだ。

いくら何でもギャングの親分の情婦とわかって手を出すとはい体どうということ？そう思っていると、本作全体は基本的に史実にもとづいてつくられているものの、グレイスは脚本上の人物らしい。なるほど、なるほど……。たしかに男中心のギャング映画にも一人くらい美人の登場は不可欠だが、6人の警察官の1人とコーエンの情婦との恋という設定はちょっとムリがあったのでは……？

＜マシンガンって、こんなに当たらないの？＞

1949年のギャング映画に、往年の西部劇のようなガンマン警察官マックス・ケナード巡査（ロバート・パトリック）が登場し活躍するのは驚きだが、本作を観ていて痛感するのは、マシンガンってこんなに当たらないの？ということ。ギャング映画には、円形ドラムマガジンが回転するマシンガンがよく似合う。ここには50発もの弾が入るらしいが、こんなマシンガンで乱射されたら、それこそターゲットは弾の穴だらけになるはずだが、さて本作では……。本作のパンフにある銃器評論家・石井健夫氏のREVIEW「銃器もまた“そこまでやるか！？”の世界的な豪華競演！」には詳しい銃器の解説があるが、本作中盤で展開されるカーチェイスに見る銃撃戦やクライマックスに見る銃撃戦を見ていると、オマラやジェリーたちは弾の方が勝手に避けていくの？と思うほど、弾が当たらない。違法行為によってコーエンの友人の判事にサインさせた逮捕状を武器に、コーエンを逮捕するべくその本丸に乗り込んだオマラたちは真正面から入口に向かって立っているのだから、2階から狙いうちすればイチコロ。また、コーエンの部下たちは本丸内の地理に詳しいのに対し、オマラたちはそれを全く知らないのだから、本丸内での銃撃戦は圧倒的にコーエン側に有利。したがって、コーエンがいとも簡単に返り討ちできると読んだのは当然だが、さて本作が描くクライマックスの攻防は？

そんなマシンガン対決には少し不満があるが、その後に展開される男同士のボクシングの勝負は見どころいっぱい。ボクサーあがりのコーエンに対して、オマラは警察官としての訓練を積んでいるとはいえボクシングには素人のはずだが、その勝敗は？俺に歯向っているのはギャングではなく警察官だ。そう覚ったコーエンによるオマラの妻コニー・オマラ（ミレイユ・イーノス）に対する報復は当然だが、その結果も含め、クライマックスの銃撃戦終了後の本作の意外なおチ話（？）も、しっかりと楽しみたい。

2013（平成25）年5月15日記